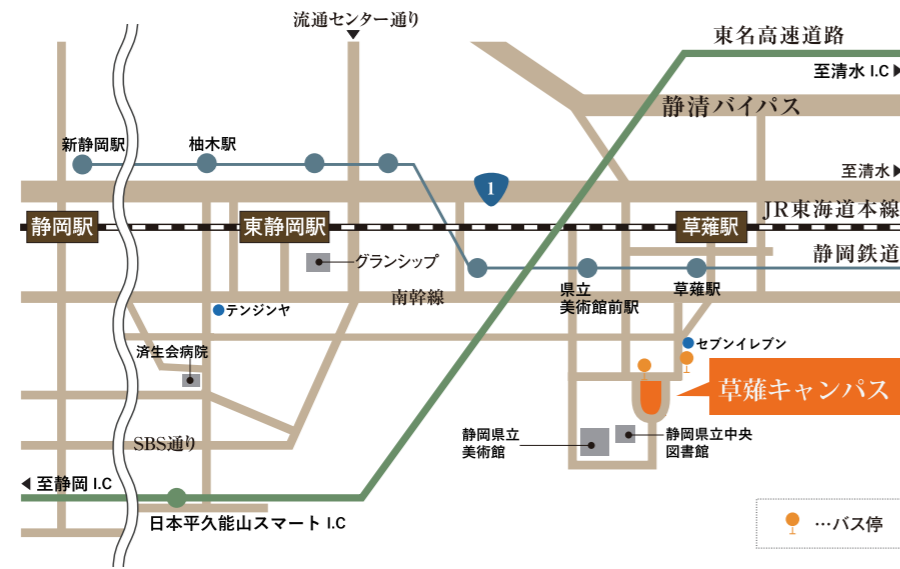
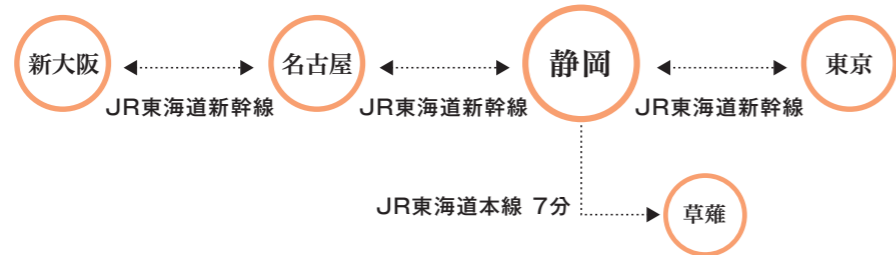


■ ご案内 (大学所在地・交通)



● 静岡までのアクセス

- 東京から：東京→静岡 約1時間
- 名古屋から：名古屋→静岡 約1時間
- 大阪から：新大阪→静岡 約2時間 (いずれも「新幹線ひかり号」を使用した場合)



● 最寄り駅から草薙キャンパスへのアクセス

【草薙キャンパス】

- 徒歩 JR「草薙駅」南口(県大・美術館口)、または静岡鉄道「県立美術館前駅」静岡鉄道「草薙駅」から徒歩15分
- バス 静鉄バス JR「草薙駅」南口(県大・美術館口)バス停から草薙団地行き(三保草薙線)で「県立大学入口」下車、徒歩5分 *平日の午前のみ、「県立大学前」下車が可能(下車0分)



〒422-8526 静岡県静岡市駿河区谷田 52-1 (草薙キャンパス)

TEL 054-264-5102 (代表) 054-264-5007 (学生部入試室)

<https://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/>

静岡県立大学 大学院 国際関係学研究科 2024

Graduate School of International Relations
University of Shizuoka

研究科案内

国際関係学研究科の特色

1

国際的な場で活躍できるスペシャリストの養成

グローバル企業、国際NGOなどの国際機関、または、国際化するわが国の行政、教育、社会、文化、ジャーナリズムなどの分野で活躍できるスペシャリストの養成を図ります。2専攻各5名の学年定員に、60名に及ぶ充実したスタッフを配置し、先端の研究に基づく学際的できめ細かい指導にあたります。

2

最新の国際関係を分析する研究視点の提示

21世紀の国際社会の動向を理解するためには、政治、経済、法律、文化といった様々な領域を考慮した新しい研究枠組みを提示する必要があります。唯一の超大国としての米国、台頭する中国、国家の枠を超えて統合を試みる欧州、不安定要素を抱えながらも新たな市場として期待される新興国など、わが国を取り巻く世界は激変しています。グローバル化する経済、地球環境の問題など、複雑化する国際関係に対する新たなアプローチを探究しています。

教育理念

国際関係学研究科は、地球規模の諸関係の緊密化が進む今日の世界において、国際的な俯瞰力と国際関係に関連する専門力により、国際社会や地域社会における諸課題を探究できる能力を育成し、それを活用して、教育・研究機関、官庁、民間企業、NGO・NPO等の国際社会や地域社会の多様な現場で活躍できる人材を育成することを理念とします。また、純粋に国際関係に関連する高度な専門知を学びたいという社会人や市民のニーズに応えます。

教育目標

本研究科は、左記の教育理念の実現に必要なとされる専門的知識と研究技法を修得し、修了後、それを活用して国際社会や地域社会における諸課題を探究できる能力を育成することを教育目標とします。国境を越えた研究の視座の獲得のために国際関係学専攻、文化や言語の比較研究の視座の獲得のために比較文化専攻を設置して、国際的な俯瞰力の育成に力点を置いています。また、多様な専門分野による教育課程を配置することで、専門性と学際性を併せ持つ人材の育成を目指します。



3

グローバル化する市民社会を学際的な観点から分析

グローバル化の進行により、国家を単位としてきた従来の専門分野による研究の限界が目立つようになり、国境を越えた市民の行動を、様々な専門分野の協力に基づく調査研究を通じて、学際的に究明することが現在重要になっています。こうした状況に即して、社会学、社会心理学、文化人類学、メディア研究等の諸分野による学際的なアプローチを試みます。グローバル化の時代に即したグローバル・スタディーズと呼ばれる新しい調査研究のアプローチを身につけることを目指しています。

4

幅広い比較の視点から文化の諸相を解明

世界における様々な文化のあり様を、言語、文学、歴史、思想、宗教などの観点からとらえ、その様態を究明する研究を行っています。さらに、比較研究法を習得することによって、学問領域内外の視点を広げるとともに、多様な文化や価値観の固有性と普遍性を解明し、国際社会を複眼的にみるができる人材を養成します。

5

グローバルな視野の獲得

日本、アジア、英米、ヨーロッパを中心とする4つの地域研究分野を設け、それぞれの地域を熟知した専門的研究を深めるとともに、比較研究のための方法論を身につけます。地域を深く知ると同時に比較によって視野を広げることを通じて、グローバルな視野を獲得することに重点をおいています。

国際的な俯瞰力と高度な専門知を養い、世界の諸課題を探究

国際関係学研究科は1991年の創設以来、国際関係の諸課題を探究するための知性を養った人材を多数輩出してきました。近年国際情勢はもとより自然災害や新型コロナウイルス感染症の蔓延が世界の人々の生活に影響することへ意識を向ける機会が増えました。人と人、人と組織、人と政府、政府間、企業間、政府と国際機関などの諸関係が変わりゆく世界で、諸課題を探究するための複眼的な知性を発達させる国際関係学研究科の真価を発揮する時であります。国際関係学研究科では、社会を分析するための知識の基盤を成す社会科学と人間への深い洞察を促す人文学で編み込まれる2つの専攻と6つの研究分野を設け、国際的な俯瞰力と国際関係に関する専門知を養う教育課程で学びます。修了生は国際関係学研究科で培った知性を国際社会や地域社会における諸課題の探究に利用し、世界中で活躍しています。

国際関係学研究科が掲げる国際的な俯瞰力を養うには、国境を超えた研究の視座と文化や言語の比較研究の視座の獲得が必要です。前者は国際関係学専攻、後者は比較文化専攻が担い、学生はいずれかの専攻に配列している研究分野で高度な専門知を修得します。学生が集中的に取り組む研究分野での科目履修の他に、指導教員が認めれば他の専攻、他の研究科、他の大学院研究科での科目履修の要望に応じることが出来ます。国際関係学研究科が標榜する学際性、国境を超えた地球規模での研究の視座、数多くの文化と言語の比較研究を理由として、徹底的に学生の主体的な学修を支えます。学ぶ意欲のある学生を歓迎する研究科とお考え下さい。

国際関係学研究科ではコースワークとリサーチワークを組み合わせた教育課程を用意し、二次で中心となるリサーチワークでは、適切な研究テーマを設定し、一貫した論理展開により自らの研究の独自性を提示する能力を身につけます。修士論文あるいは特定の研究課題成果として形にするまでに、中間報告と口述審査を実施します。指導教員と副指導教員による丁寧な指導を用意しており、学生一人一人の論文作成に向き合います。国際関係の諸課題を漠然と眺めるだけでは済まされないと思う学生が、ユニークな問題意識を掲げて国際関係学研究科のリサーチワークで形にするとの志があれば、教員一同で応えます。

国際関係学研究科の取り組みにご期待下さい。

大学院国際関係学研究科長 澤田 敬人

Contents

国際関係学研究科の特色	01	Q&A・修士論文題目・就職先	17
国際関係学研究科3つのポリシー	03	在学生・修了生の声	18
研究分野の紹介	04		
教員紹介	05		
国際関係学専攻	05		
比較文化専攻	09		

*本研究科では、大学院生が指導教員とすることができるのは教授・准教授のみです。このため、本パンフレットの「教員紹介」には、2024年度新入生が指導教員とすることができる教授・准教授および研究所所属の助教のみのプロフィールを掲載しています。全教員の詳しいプロフィールは、下記サイトの教員紹介をご参照ください。
<https://db.u-shizuoka-ken.ac.jp/index.php/prof/faculty/3>

- 大学公式サイト
<https://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/faculties/graduate-international/>
- 国際関係学研究科特設サイト
<https://ir.u-shizuoka-ken.ac.jp/grad/>
- 大学院入試の詳細
<https://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/admissions/graduate/>

国際関係学研究科の3つのポリシー

1 学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)

国際関係学専攻

本専攻は、教育理念・目標に掲げた「国際社会や地域社会における諸課題を探究できる能力」の内容を以下の通り定めています。

1. 専門分野の文献を適切に理解・評価し、研究報告を行うことのできる能力。
2. 専攻した専門分野の知識と方法論を修得し、それを国際的な俯瞰力とともに活用できる能力。
とくに、国際関係学専攻においては国境を越えた研究の視座を修得していること。
3. 研究や調査の遂行に必要なとされる学術的な外国語の能力。
4. 国際関係に関連する妥当な研究テーマを設定し、それに沿って一貫した論旨を展開できる能力。
5. 先行研究を踏まえて、自らの研究内容の独自性を提示し、展開できる能力。
6. 自らの研究内容について口頭で適切な説明と応答ができる能力。
7. 研究倫理について十分に配慮できる能力。

研究科規程に記載された修了要件を満たした大学院生を上記の能力を身につけた者と認め、修士の学位を授与します。

比較文化専攻

本専攻は、教育理念・目標に掲げた「国際社会や地域社会における諸課題を探究できる能力」の内容を以下の通り定めています。

1. 専門分野の文献を適切に理解・評価し、研究報告を行うことのできる能力。
2. 専攻した専門分野の知識と方法論を修得し、それを国際的な俯瞰力とともに活用できる能力。
とくに、比較文化専攻においては、文化や言語を比較研究できる視座を修得していること。
3. 研究や調査の遂行に必要なとされる学術的な外国語の能力。
4. 国際関係に関連する妥当な研究テーマを設定し、それに沿って一貫した論旨を展開できる能力。
5. 先行研究を踏まえて、自らの研究内容の独自性を提示し、展開できる能力。
6. 自らの研究内容について口頭で適切な説明と応答ができる能力。
7. 研究倫理について十分に配慮できる能力。

研究科規程に記載された修了要件を満たした大学院生を上記の能力を身につけた者と認め、修士の学位を授与します。

2 教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)

学位授与の方針に示される能力を有する人材を育成するために、国際関係学研究科は、以下の方針に基づき、教育課程を編成しています。

1. 本研究科は、コースワークとリサーチワークを適切に組み合わせた教育課程を体系的、順次的に編成する方針をとります。修士課程一年次はコースワーク中心で学び、二年次ではリサーチワーク中心に移行します。
2. コースワークをおもに共通科目と専門科目から編成し、学術的な文献理解能力、研究報告能力の鍛錬と同時に、専門的知識と研究の方法論を修得することを目指します。専門科目は専門性を深めるために6つの研究分野ごとに編成されており、共通科目では専攻に必要な重点的能力を修得します。
3. コースワークの中心となる研究分野ごとの専門科目は学際的に編成されており、研究の視野を広げることの方針とします。また、所属研究分野外の科目も履修することも可能で、知識を学際的に修得できるように配慮されています。
4. リサーチワークは、各研究分野で開講されている演習科目、およびフィールドワークにおいて行う方針です。適切な研究テーマを設定し、それに沿って一貫した論旨を展開できる能力、先行研究を踏まえて自らの研究内容の独自性を提示し、展開できる能力を身につけます。
5. コースワークの評価はシラバスに明記された各授業の評価基準にそって行います。リサーチワークの評価のために、中間報告、および口述審査を行い、審査基準に基づき修士論文、あるいは特定の研究課題成果を審査します。また、教育課程全体の評価方針として、コースワーク、およびリサーチワークのルーブリックによる評価を実施します。
6. 教員専修免許状(国語、英語)等、各種の資格等に必要となる科目を設置します。
7. 学術的な外国語能力の修得のための科目を設置します。また、留学生を対象とした日本語修士論文執筆指導の体制を整えます。

3 入学者受け入れ方針(アドミッション・ポリシー)

本研究科は、意欲的な学部卒業生のみならず社会人や留学生も広く受け入れることを方針としています。学部在学生のために推薦特別選抜、留学生のために外国人特別選抜、社会人のために社会人特別選抜を実施します。外国語筆記試験、口頭試問、書類選考等を通じて、以下の資質や能力を示した者を受け入れます。

1. 国際関係に関連する専門分野の明確な問題意識を抱き、基礎的な知識をふまえて、それを学術的に探究する意欲を持つ者。
2. 専門的な知識と研究方法を修得する意欲、および国際的、学際的な幅広い視野を獲得する意欲を持つ者。
3. 外国語や国際関係に関する一定の知識を持ち、それを研究や調査の遂行に活用することで、学術的な外国語運用力を高めたいという意欲を持つ者。
4. 本研究科で修得した能力を活かして、国際社会や地域社会において活躍する将来の見通しを明確に持つ者。もしくは、専門知を純粋に学びたいという意欲を持つ者。

研究分野の紹介

国際関係学専攻 Division of International Relations

国際政治・開発研究分野 International Politics and Development

国際政治・開発研究分野は、国際政治学、国際経済学、国際経営学、国際法学などの立場から、国際政治研究・開発研究の幅広いニーズに対応する科目群を設けています。修士論文作成に際しては東アジア、中東、アメリカ、ヨーロッパを軸とした地域研究の手法から研究指導を行うこともできます。

国際社会・文化研究分野 Socio-Cultural Studies of Global Issues

国際社会・文化研究分野は、社会学、人類学、社会心理学、コミュニケーション学などの立場から、グローバルな課題に取り組んでいる学際的な研究分野です。社会調査やフィールドワーク、計量分析などの手法を用いて、国境を越えた市民の行動を実証的に解明することを通じて、マイノリティと人権、多文化共生、ジェンダー、開発と環境などの地球社会の重要課題を研究しています。

比較文化専攻 Division of Comparative Culture

日本文化研究分野 Japanese Culture

日本の言語・文学・思想という比較文化の基礎となる領域を扱います。具体的には、日本語教育、古典語から現代語の分析、また古代、中世、近世から近代に至るさまざまな文学や思想の研究を行います。国語教員専修プログラムが設けられています。

アジア文化研究分野 Asian Culture

中国、朝鮮半島、東南アジア、南アジア、ロシアなど、広大なアジアの国や地域を、国際関係論、政治学、経済学、社会学、文化人類学、歴史学、哲学、宗教学など、様々な切り口から総合的に捉え、その実態と本質に迫ります。

英米文化研究分野 British and American Culture

言語理論、歴史、文学、社会学、コミュニケーション学などの研究領域について、英米を主とする諸地域間や過去と現在を比較する視点から研究を進めるとともに、学術の探究に必要な英語技能を高め、方法論を修得する科目を配置し、英語教員専修プログラムを設けています。

ヨーロッパ文化研究分野 European Culture

ドイツ、フランス、スペインをはじめとするヨーロッパの各地域に密着し、文学、文化、歴史、思想、社会などを比較研究という大きな枠組みで取り上げます。さらに、人間科学を含め広い視野から文化を再考し、ヨーロッパ社会における持続と変化を追及します。

研究の基軸としての三つの研究科附属センター

研究科附属の研究センターは、それぞれ、国際会議の開催などを通じ研究者間の相互交流を図り、地域の研究拠点となることを目指しています。

現代韓国朝鮮研究センター Center for Korean Studies

広い視野からの朝鮮半島研究をモットーとして2003年に設置されました。本学アジア研究の蓄積を基礎に、研究(ワークショップ、社会調査、海外提携機関との共同研究等)、社会・地域貢献(政策提言、県民公開シンポ等)、教育(特別講義、日韓合同ゼミ等)の三本柱で活動しています。

広域ヨーロッパ研究センター Wider Europe Research Center

西欧・南欧はもちろん、中東欧、バルカン、旧ソ連地域までを含む広域ヨーロッパを、地域的に広い文脈と時間的に長い視野で捉えた研究の拠点となることを目指し、個々の地域および地域間の政治文化や歴史的形成過程、EUの拡大と統合などについて学際的な研究を進めています。

グローバル・スタディーズ研究センター Center for Global Studies

グローバルな構造や変動への視点と知識、個々の具体的な課題へのコミットメントの両面から、調査と研究を行い、グローバルイノベーションに関わる諸課題の解明と解決に寄与しようとする学際的な組織です。教育活動を通じて、地球市民的視野から変動する社会に能動的に参加する人材の養成を目指します。

国際関係学専攻 教員紹介

国際政治・開発

坂巻 静佳 Shizuka Sakamaki

●教授 [博士(法学)] ✉ sakamaki@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 国際法、海洋法

[研究テーマ] 国家の裁判権免除、政府職員の免除、軍艦・政府公船の免除、海洋管轄権



国際法上、一定の主体に対しては外国の管轄権からの免除が認められてきました。しかし、その対象・範囲は、国家等の活動内容の移り変わりや、国際人権法・国際刑事法等の発展を背景に徐々に変化してきました。そこで、免除に関して現在どのような国際法規則が成立しているのか、免除は国際法体系

のなかでどのような機能を果たしているのか等について、検討しています。また、免除に関する国際法規則の発展には軍艦・政府公船が大きな役割を果たしました。船舶の免除の理解には海域の管轄権に関する理解が必要です。そのため海洋法についても検討を進めています。

国際法には未解決の問題が数多く残されています。また、国際法は国際社会の展開とともに日々発展しており、新たな謎がいままさに生まれています。学部時代に培った国際法に関する基礎的理解を礎に、国際法に関する未解決の問題に取り組んでみませんか。共に研究できることを楽しみにしています。

国際政治・開発

古川 光明 Mitsuaki Furukawa

●教授 [博士(社会学)] ✉ furukawa.mitsuaki@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 国際協力、アフリカ地域研究

[研究テーマ] 国際援助システム、国際援助行政、平和構築支援、南スーダンと社会関係資本、SDGs



国際協力を理解するためには、中長期的視点に立って、地域や国によって異なる個々の開発途上国の真のニーズを把握するための分析能力と国に応じた援助計画の立案能力、そして、支援対象国の国情、つまり、政治、経済、社会、文化、人的側面等を総合的に把握し、最も効果的な支援とはなにかを自問するとともに、具体的なビジョンを描くことが重要です。学生には、それを行える基礎理論と応用力、さらに、異文化理解や他者理解に基づくコミュニケーション能力等の促進が可能となる機会の提供が必要です。これまでのJICA、外務省、国連、世界銀行、また、現場での豊富な業務経験と研究経験を踏まえ、現場での実践やリアリティが有機的に繋がるような機会を提供するなかで、昨今の多様化する国際協力のニーズに対応した新たな指針を提示できる人材や、混迷の度を増す国際社会のなかにおいても、地域社会や国際社会での貢献と活躍ができる人材の育成を目指しています。

かを自問するとともに、具体的なビジョンを描くことが重要です。学生には、それを行える基礎理論と応用力、さらに、異文化理解や他者理解に基づくコミュニケーション能力等の促進が可能となる機会の提供が必要です。これまでのJICA、外務省、国連、世界銀行、また、現場での豊富な業務経験と研究経験を踏まえ、現場での実践やリアリティが有機的に繋がるような機会を提供するなかで、昨今の多様化する国際協力のニーズに対応した新たな指針を提示できる人材や、混迷の度を増す国際社会のなかにおいても、地域社会や国際社会での貢献と活躍ができる人材の育成を目指しています。

国際政治・開発

山下 光 Hikaru Yamashita

●教授 [Ph.D.(International Politics)] ✉ hikaru@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 国際政治思想、国際平和協力、安全保障論

[研究テーマ] ポスト冷戦期における多国間紛争管理の変化と意味合い



これまでの研究は主に国際政治の諸理論・概念、紛争管理・国際平和協力(平和維持、平和構築など)、人道・人権問題、国際機構・制度(国連、地域機構など)に関するものです。特に、地域紛争などに際して多国間枠組みを通じて組織される国際的な協力活動について、それを支える思想から実施するための政策、国際政治上の意味合いなどについて考察を進めてきました。

現代世界において起きるさまざまな紛争や人々の安全保障を脅かす諸問題にどのように国際社会が協力すべきであり、そしてそれがどの程度可能なのか。またそうした「紛争」や「協力」が起きる国際関係の現在や未来をどのように理解したらいいのか。これらの問いに関心を有し、積極的な問いかけを行うことができる学生の皆さんと議論ができることを楽しみにしています。

現代世界において起きるさまざまな紛争や人々の安全保障を脅かす諸問題にどのように国際社会が協力すべきであり、そしてそれがどの程度可能なのか。またそうした「紛争」や「協力」が起きる国際関係の現在や未来をどのように理解したらいいのか。これらの問いに関心を有し、積極的な問いかけを行うことができる学生の皆さんと議論ができることを楽しみにしています。

国際政治・開発

小窪 千早 Chihaya Kokubo

●准教授 [修士(法学)] ✉ c-kokubo@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 国際政治学、フランス外交、欧州の政治

[研究テーマ] フランスの政治・外交・安全保障、ヨーロッパ(EU、NATO)の外交・安全保障



フランスの第五共和制ドゴール期を中心とする外交史を専門としており、また現代フランスの政治・外交・安全保障や、EUやNATOの安全保障政策などを研究しています。かつて国際政治の中で中心的な役割を果たしてきたヨーロッパは、今なお大きな役割を果たす一方で、現在では様々な問題に直面しています。地域を超えた日本とヨーロッパとの協力関係も近年急速に緊密になっており、国際関係を深く理解するうえでヨーロッパ地域を研究する意義は、近年改めて高まっていると考えています。そしてヨーロッパで今起こっていることを深く理解するには、その地域の歴史についても深く知る必要があります。そのような観点から、歴史を踏まえた研究を重視するとともに現在の国際関係の動向を見据えた研究を心がけています。そのような関心を持つ意欲ある学生とともに研究できることを期待しています。

フランスの第五共和制ドゴール期を中心とする外交史を専門としており、また現代フランスの政治・外交・安全保障や、EUやNATOの安全保障政策などを研究しています。かつて国際政治の中で中心的な役割を果たしてきたヨーロッパは、今なお大きな役割を果たす一方で、現在では様々な問題に直面しています。地域を超えた日本とヨーロッパとの協力関係も近年急速に緊密になっており、国際関係を深く理解するうえでヨーロッパ地域を研究する意義は、近年改めて高まっていると考えています。そしてヨーロッパで今起こっていることを深く理解するには、その地域の歴史についても深く知る必要があります。そのような観点から、歴史を踏まえた研究を重視するとともに現在の国際関係の動向を見据えた研究を心がけています。そのような関心を持つ意欲ある学生とともに研究できることを期待しています。

国際政治・開発

前山 亮吉 Ryokichi Maeyama

●教授 [博士(政治学)] ✉ maeyama@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 日本政治史、比較政治論

[研究テーマ] 選挙・政党を中心とした近代・現代日本政治の比較研究



私の研究は近代・現代日本政治の比較を目指しています。比較の基礎として正確な事実を把握するため、近代日本政治の歴史分析を特に大事な仕事に、位置付けております。現代の行政改革との比較の基礎作業として取り組んだ、博士學位論文『近代日本の行政改革と裁判所』(1996年、信山社出版)を刊行しました。こうした問題意識は一貫しており、「小会派政治家の選挙・政党観—花井卓哉と田川大吉郎」(『歴史の中の日本政治—自由主義の政治家と政治思想—』第1巻所収、2014年、中央公論新社)等選挙・政党に関する研究を現在は継続して行っており、発表してきた個別論文を再構成し刊行することが今後の課題です。

派手な印象のある政治学ですが、こうした地味な基礎研究の積み重ねの上に成り立っています。政治史を中心とした政治学の基礎研究に、真摯に取り組む学生との出会いを歓迎いたします。

派手な印象のある政治学ですが、こうした地味な基礎研究の積み重ねの上に成り立っています。政治史を中心とした政治学の基礎研究に、真摯に取り組む学生との出会いを歓迎いたします。

国際政治・開発

森山 優 Atsushi Moriyama

●教授 [博士(文学)] ✉ moriyama@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 昭和戦前・占領期日本政治外交史他

[研究テーマ] 日米開戦期の政治外交・インテリジェンス史、政軍関係、地域史、博物館展示と歴史表象



日本近現代史について幅広く研究しています。

日米開戦における意思決定過程の分析では、アクターの「非(避)決定」という行動パターンを抽出し、研究を深化させました。

また、戦時・戦後期に国民を啓蒙・動員するために使用された印刷紙芝居の研究や、静岡の重鎮だった河井弥八(掛川出身、侍従次長、貴族院議員、参議院議長等を歴任)の実証研究、博物館における戦争展示のあり方など、研究対象は多岐にわたっています。

何にでも興味を持って探求することができる好奇心に満ちた学生の皆さんと、共に学ぶ喜びを分かち合いたいです。

国際政治・開発

佐藤 真千子 Machiko Sato

●准教授 [博士(学術)] ✉ machikos@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] アメリカ政治外交史、国際関係論

[研究テーマ] 自由民主主義の価値に基づく外交の系譜



アメリカ外交を方向づけてきた自由民主主義の理念が、どのような政策として具現化され、どのように実行され、アメリカがそれをどう認識してきたのかについて歴史的検証を行っています。

これは、価値や倫理を追求する外交に潜む問題、アメリカの国際問題に対する思考についての考察です。とりわけ海外の人権擁護や民主化支援に関係する非政府組織と政策決定の相互作用に注目しています。したがって、私の研究領域はアメリカ外交史、アメリカ知識人の思想、アメリカ政治、国際関係が交錯したところにあります。

最近では、さまざまなタイプの権威主義体制に対する政策、ロシアの人権問題に取り組む民間団体と対外的ネットワークの政治過程、合衆国憲法の政教分離の原則のもとで変化する宗教と政治の関係、制度化された国際的宗教の自由の問題と安全保障の関係性について検証を進めています。

国際政治・開発

浜 由樹子 Yukiko Hama

●准教授 [博士(国際関係学)] ✉ yhama@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 国際政治学、国際関係史、ロシア地域研究

[研究テーマ] ロシアのユーラシア・アイデンティティ、地域概念の形成と国際政治



「我が国とは何か」「我々は何の地域に属しているのか」—こうした自己認識は、特定の歴史的条件下で形成され、共有されていきます。外交方針を説明する際にも、その地域に属する国家として、何をどうしたいのかという理念は必要とされます。19世紀以来、自分たちのアイデンティティを問い続けてきたロシア(そして日本)を主な事例として、地域的アイデンティティと国際政治との関係を、歴史や国際政治学の観点から分析してきました。また、思想・イデオロギーによる社会動員という視点から、最近では「文化冷戦」論にも射程を広げています。

国際政治は、私たちの生活に密接に結びついています。日常生活のレベルからグローバルな思考をできるようになること、同時に、地域研究を通じて、自分とはおおよそ異なる経験をしてきた人々への想像力を養うことを目指します。知的好奇心の場である大学院で、学生の皆さんと共に研究できることを期待しています。

国際関係学専攻 教員紹介

国際政治・開発

宮崎 晋生 Kunio Miyazaki

●准教授 [商学博士] ✉ miyazaki@u-shizuoka-ken.ac.jp ☎ 054-264-5338

[専門分野] 国際経営論・多国籍企業論・経営学

[研究テーマ] 企業経営とイノベーション、産学官連携とビジネスエコシステムの国際比較



企業や組織、セクターの枠を越える「新結合」=Open Innovationの動きが現在世界で活発化していることに注目しています。これは何もシリコンバレーや深圳のような先端産業の集積地だけの現象ではありません。静岡においてさえ、その動きが模索されています。国境、組織やセクターの境界を越え、異なる分野の「新結合」=イノベーションがいかに発生するか、どのようなイニシアチブが求められるか、一緒に考えていければ幸いです。

またICTの発達により「先進国」「新興国」の境界が一気に曖昧に近づきます。「新興国」から一足跳びに「先進国」を飛び越える新技術・ビジネスモデルを創造するLeapfrogging現象にも注目しています。そうした新時代の「新興国」からのイノベーションについても興味のある人を歓迎します。援助と善意だけではなく、企業家精神の育成や事業創造という視点から「開発」を考えるきっかけになることでしょう。

またICTの発達により「先進国」「新興国」の境界が一気に曖昧に近づきます。「新興国」から一足跳びに「先進国」を飛び越える新技術・ビジネスモデルを創造するLeapfrogging現象にも注目しています。そうした新時代の「新興国」からのイノベーションについても興味のある人を歓迎します。援助と善意だけではなく、企業家精神の育成や事業創造という視点から「開発」を考えるきっかけになることでしょう。

国際社会・文化

飯野 勝己 Katsumi Iino

●教授 [博士(文学)] ✉ k-iino@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 哲学、言語哲学、コミュニケーション論

[研究テーマ] 言語とコミュニケーションの哲学、「力」と「暴力」の哲学・倫理学



イギリスの「日常言語学派」の研究を出発点に、コミュニケーション論的な言語哲学に主として取り組んでいます。その途中段階の集大成として著書『言語行為と発話解釈』(勁草書房、2007年刊)があります。また、日常言語学派を代表するJ.L.オースティンの『言語と行為』の新訳も手掛けました(講談社学術文庫、2019年刊)。「言葉の力」を解明する糸口として「言葉の暴力」の分析にも取り組み、その関連の共同研究の報告として『暴力をめぐる哲学』(共編著、晃洋書房、2019年刊)があります。

とりわけ人文系の大学院は、自分独自の問いを持ち、自分自身の力で研究を行うことが大切です。たとえ今はつたなくても、自分の頭で考え、自分の言葉で表現する力、というより姿勢を持った学生を求めます。

とりわけ人文系の大学院は、自分独自の問いを持ち、自分自身の力で研究を行うことが大切です。たとえ今はつたなくても、自分の頭で考え、自分の言葉で表現する力、というより姿勢を持った学生を求めます。

国際社会・文化

湖中 真哉 Shinya Konaka

●教授 [博士(地域研究)] ✉ konaka@u-shizuoka-ken.ac.jp ☎ 054-264-5267

[専門分野] 地域研究、人類学、国際開発研究

[研究テーマ] 特定地域のフィールドワークによる地球規模課題(貧困、紛争、難民、環境等)の研究



地域研究、人類学(文化人類学、環境人類学)、国際開発研究が専門です。世界中のどこでもかまいません。どのような地域の問題でもかまいません。特定の地域に着目して、現地でフィールドワークを行うことを通じて、地域住民の目線に立ってその地域や地球規模の課題に挑戦してみたいとお考えの皆さんをサポートします。本を読むだけではなく調査の技法を身につけることを通じて現地の社会から学んでみたいとお考えの方に向いています。これまでアフリカの遊牧社会を対象として貧困、紛争、難民、環境、メディア等の調査研究を行い、著作は国際開発研究と地域研究の学術賞を受賞しています。フィールドワークによる調査研究能力を身につけることを通じて母国や他国が抱える課題に取り組んでみたい、フィールドワークによって日本の地域社会をもっと深く知ってみたい、母国と他国でフィールドワークを行い、両者を比較してみたいとお考えの留学生も歓迎します。

地域研究、人類学(文化人類学、環境人類学)、国際開発研究が専門です。世界中のどこでもかまいません。どのような地域の問題でもかまいません。特定の地域に着目して、現地でフィールドワークを行うことを通じて、地域住民の目線に立ってその地域や地球規模の課題に挑戦してみたいとお考えの皆さんをサポートします。本を読むだけではなく調査の技法を身につけることを通じて現地の社会から学んでみたいとお考えの方に向いています。これまでアフリカの遊牧社会を対象として貧困、紛争、難民、環境、メディア等の調査研究を行い、著作は国際開発研究と地域研究の学術賞を受賞しています。フィールドワークによる調査研究能力を身につけることを通じて母国や他国が抱える課題に取り組んでみたい、フィールドワークによって日本の地域社会をもっと深く知ってみたい、母国と他国でフィールドワークを行い、両者を比較してみたいとお考えの留学生も歓迎します。

国際社会・文化

高畑 幸 Sachi Takahata

●教授 [博士(文学)] ✉ takahata@u-shizuoka-ken.ac.jp ☎ 054-264-5323

[専門分野] 社会学、在日外国人研究(特にフィリピン人)

[研究テーマ] 地域社会における多文化共生の社会的条件に関する研究、在日フィリピン人の諸問題



1990年代前半より、在日フィリピン人社会を対象にフィールドワークを重ねている社会学者です。これまで、地域社会の多文化共生、結婚移民の定住、1.5世代・第2世代の教育問題、言語・文化の世代間継承、介護労働への参入、高齢化、そして日系人の家族移住等をテーマとしてきました。教育方針は「学生さんとともに学び、歩き、考える」、研究方針は「歩く、見る、聞く、書く」です。

日本国内における移民や多文化共生は現在進行形の課題であり「正解」はまだありません。大学院では、日本語・英語の文献購読に加えて丁寧にフィールド調査を行うことを重視します。研究対象者との出会いと対話を大切に、フットワーク軽く、集中力をもって研究する人を歓迎します。

日本国内における移民や多文化共生は現在進行形の課題であり「正解」はまだありません。大学院では、日本語・英語の文献購読に加えて丁寧にフィールド調査を行うことを重視します。研究対象者との出会いと対話を大切に、フットワーク軽く、集中力をもって研究する人を歓迎します。

国際社会・文化

石井 由香 Yuka Ishii

●教授 [博士(社会学)] ✉ yishii@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 国際社会学、地域研究(東南アジア、豪州)

[研究テーマ] アジア系専門職移民の政治・社会・文化参加、東南アジアの移民受入政策と国民統合



国際社会学、特にマイグレーション研究、エスニシティ研究を専門としています。方法論としては社会学、国際関係論を基礎としますが、必要に応じて他の専門分野の理論、研究成果も取り入れて分析・考察を行っています。主な研究対象国・地域は東南アジア(マレーシア・シンガポール)、オーストラリアです。アジア太平洋における人の国際移動と移民受入国の政治・社会変容を、華人を中心とするアジア系移民の動向を追いつつとらえようとしています。また、日本の状況についても、比較の視点を持ちながら把握するように常に心がけています。

大学院では、アジア太平洋地域の移民・難民、エスニック関係を修士論文のテーマとし、社会学、国際関係論の理論、アプローチを学びたい院生を指導します。アジア太平洋地域は広大ですし、多様なテーマ、方法の設定があり得ますので、指導を希望される方はまずメールで御相談ください。

国際社会・文化

犬塚 協太 Kyota Inuzuka

●教授 [社会学修士] ✉ inuzuka@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 家族社会学、ジェンダーの社会学

[研究テーマ] 近代家族の形成と変動、ジェンダーの変容とジェンダー政策、家族政策の展開



近代家族と呼ばれる家族モデルがどのように形成されてきたか、またそれは今後どのように解体して行くのか、家族変動論と家族意識論の観点から、特にその基盤にある性別役割分業というジェンダー規範の変容を通して捉えることを主な問題意識として近現代の家族とジェンダーを研究しています。またジェンダー平等をめざす政策的、社会的取組とその成果の検証を通して、現代におけるジェンダー政策や家族政策の望ましい方向性を探ることも強い関心を持っています。学生の皆さんには、ぜひ既存の家族観やジェンダー観に縛られず、それらを相対化し批判的視点から家族やジェンダーの実相を解明する研究姿勢をぜひ身につけてもらいたいと願っています。家族の多様化に関心を持ち、ジェンダー平等の実現に寄与する社会学をめざす学生を歓迎します。

近代家族と呼ばれる家族モデルがどのように形成されてきたか、またそれは今後どのように解体して行くのか、家族変動論と家族意識論の観点から、特にその基盤にある性別役割分業というジェンダー規範の変容を通して捉えることを主な問題意識として近現代の家族とジェンダーを研究しています。またジェンダー平等をめざす政策的、社会的取組とその成果の検証を通して、現代におけるジェンダー政策や家族政策の望ましい方向性を探ることも強い関心を持っています。学生の皆さんには、ぜひ既存の家族観やジェンダー観に縛られず、それらを相対化し批判的視点から家族やジェンダーの実相を解明する研究姿勢をぜひ身につけてもらいたいと願っています。家族の多様化に関心を持ち、ジェンダー平等の実現に寄与する社会学をめざす学生を歓迎します。

国際社会・文化

孫 晓刚 Xiaogang Sun

●准教授 [博士(地域研究)] ✉ sun@u-shizuoka-ken.ac.jp ☎ 054-264-5322

[専門分野] 生態人類学、人文地理学、アフリカ地域研究

[研究テーマ] 人と自然の共生、気候変動と自然災害に対する地域社会の対応



研究:多様性・人と自然の共生・持続と変容をキーワードに、アフリカの多様な自然環境に暮らす人々を対象とした人類学的な調査・研究をおこなっています。とにかく自分の足で歩き、自分の目で確かめ、五感をフルに活用してフィールドワークすること、その上でマクロとミクロな視点から考察することを心がけています。

教育:「Seeing is believing. Think globally, act locally」、自分が学生時代に座右の銘にしていた言葉を、学生たちと共有できるように心がけています。身近な自然から遠くアフリカまで、人と自然のかかわりを切り口に、持続可能な生き方・社会のあり方について研究したい学生を歓迎します。

北野 嘉章 Yoshiaki Kitano

●助教 [博士(法学)] ✉ y-kitano@u-shizuoka-ken.ac.jp ☎ 054-264-5328

[専門分野] 国際組織法、国際刑事法

[研究テーマ] 国際刑事裁判と国際法、国際刑事裁判と国際連合、国際法主体間の相互関係



私はこれまで主に国際刑事裁判所や国際連合を題材とした研究を行い、また学部レベルでは主に国際組織法に関する諸科目を担当しています。もっとも、本研究科では研究指導や科目は担当せず、種々の研究支援制度(詳細は本冊子の紹介箇所をご覧ください)の運営など、充実した院生生活を過ごしていただくためのお手伝いを幅広く行っています。本研究科の魅力は、多様な専門分野の教員が院生の多様な学問的関心に応えられること、またアットホームであることです。院生と教員(主・副指導教員や授業担当教員や研究科助教)の間で密に指導や情報提供・交換が行われることにより、院生皆が適時必要な指導や支援を得ることができます。本冊子をご覧になり、施設を見学したい、自分の関心にあった教員を教えてくださいなどと思われた方は、お気軽に研究科(又は私個人)のメールアドレスにご連絡下さい。向学心あふれる皆さんのお手伝いができることを嬉しく思います。

私はこれまで主に国際刑事裁判所や国際連合を題材とした研究を行い、また学部レベルでは主に国際組織法に関する諸科目を担当しています。もっとも、本研究科では研究指導や科目は担当せず、種々の研究支援制度(詳細は本冊子の紹介箇所をご覧ください)の運営など、充実した院生生活を過ごしていただくためのお手伝いを幅広く行っています。本研究科の魅力は、多様な専門分野の教員が院生の多様な学問的関心に応えられること、またアットホームであることです。院生と教員(主・副指導教員や授業担当教員や研究科助教)の間で密に指導や情報提供・交換が行われることにより、院生皆が適時必要な指導や支援を得ることができます。本冊子をご覧になり、施設を見学したい、自分の関心にあった教員を教えてくださいなどと思われた方は、お気軽に研究科(又は私個人)のメールアドレスにご連絡下さい。向学心あふれる皆さんのお手伝いができることを嬉しく思います。

日本文化

澤崎 宏一 Koichi Sawasaki

●教授 [Ph.D.(East Asian Languages and Literatures)]
✉ sawasaki@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 第二言語習得研究、文処理研究

[研究テーマ] 統語や語用論に関係した日本語の第二言語習得研究や文処理研究等



日本語第二言語習得研究をテーマに取り上げる学生が、これまで多いです。音声・意味論以外の、現代日本語を対象とした言語学を研究したいという人も、場合によって相談に応じます。いずれにしても、ことばに興味があり、言語学について学びたいという気持ちが強い人、日本語だけでなく、英語でも論文を読み、アンケートなどを通して数値を扱う研究に意欲的な人が向いています。これまでの修士論文のテーマは、「第一、第二言語における関係節の処理難度ー中国語と日本語の比較ー」、「中国人日本語学習者における第二言語から第一言語への逆行転移ー主語省略と目的語省略からの考察ー」などがあります。

なお、学部生と協力して海外の大学とCOIL交流を行うという活動を続けています。積極的な参加をお願いします。

日本文化

吉田 真樹 Masaki Yoshida

●教授 [博士(文学)] ✉ yoshida@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 倫理学・日本倫理思想史

[研究テーマ] 神・仏・霊魂・源氏



私は和辻哲郎が創始した「日本倫理思想史」という学問分野のうち、あまり研究の進んでいない、超越(者)と自己とのかかわりについて研究しています。この分野は広く「日本思想史」という分野に括られがちですが、近年優勢となっている歴史学としての思想史ではなく、あくまで哲学としての思想史を私は行っているつもりです。哲学としての思想史は、どこまでも本質論的でなければならないと考えます。

具体的には、古代から近世に至る時代の神典・仏典や超越にかかわる文芸作品を読み解くことを通して、倫理の普遍と特殊について考えています。私の授業を履修する学生は、古文が読めることが条件となります。また、倫理学の基礎をある程度学んでいることが必要です。

日本文化

細川 光洋 Mitsuhiro Hosokawa

●教授 [修士(教育学)] ✉ hosokawa@u-shizuoka-ken.ac.jp
☎ 054-264-5342

[専門分野] 日本近代文学、国語科教育法

[研究テーマ] 吉井勇・北原白秋・石川啄木ら「明星」派歌人の研究、文学と地域社会の関わり



吉井勇、北原白秋、石川啄木ら「明星」派歌人の研究を専門分野とする。日記や書簡などの一次資料の調査をふまえて、彼らの文学世界を読み解いていくことを目指している。詩歌はそれが生みだされた地域との関わりも深いことから、地域社会でその文学者や作品がいかに継承され、顕彰(検証)されているかについても関心がある。現在、「地域資源としての文学」というテーマを掲げ、静岡県内の文学館と共同して、文学と地域とを結びつける活動も手掛けている。成果を地域にも還元する、アクティブな文学研究を心がけている。

日本文化

木澤 景 Kei Kizawa

●准教授 [博士(文学)] ✉ kizawa@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 倫理学・日本倫理思想史

[研究テーマ] 叡山浄土教と日本文化、日本人の真理観とその習得法、日本の「心」



私の研究は「人間とは何か」という問いを根底に、我々がどのように生きているのか、また今後どのように生きていくべきなのかを考究するものです。この考究がひとりよがりなものにならないように、かつての日本に生きた人々、例えば仏教者や武士などが、世界を、他者を、自分自身をどのようにとらえていたのかを真摯に学び、その知見に導かれながら、今ここに生きる我々自身のありようを認識すべく努めています。

指導方針としては、一人一人の「問い」にこだわり抜くことの大切さ、有効さを実感してもらうことに主眼を置いています。テキストに向かうとき、他人事としてではなく、さりとて独善的にもなりすぎず、何度もかじりついて読み直す苦労をいとわないことが大切です。また「問い」の萌芽を育て、確固たる研究課題に発展させるために、資料を広く探したり、調べたりするフットワークの軽さも重要だと考えています。

日本文化

酒井 彩 Aya Sakai

●准教授 [博士(人文科学)] ✉ aya.sakai@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 日本語教育

[研究テーマ] 日本語教師の資質・能力と役割、日本語習得と異文化間の友人関係構築



研究テーマの一つ目として、留学生のキャリアをサポートするために、日本語教師にどのような資質・能力が必要とされているか、そのために必要な教師養成・研修のあり方に関する研究を進めています。二つ目として、学内の学生同士の異文化間交流への活用を最終目標として、異文化間の友人関係における日本語使用に関する研究を行っています。

プロフィールについては下記の個人ウェブサイトも参考にしてください。

<https://www.ayasakai.jp/>

私の研究室を希望する学生には、自らの経験から生じた課題や問題意識に根付いた課題を研究で解決するため、能動的に探究することを望みます。

日本文化

竹部 歩美 Ayumi Takebe

●准教授 [博士(文学)] ✉ takebe@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 日本語学、日本語史

[研究テーマ] 源氏物語・国宝源氏物語絵巻の詞書を主たる資料とした平安時代の語彙語法の研究



中古(平安時代)の日本語の文法、いわゆる古典文法の研究を私どもは行っています。中古の日本語について知ろうとすると、『源氏物語』の調査研究を避けて通ることはできず、これを正しく読解する必要があります。そして、これを正しく読解しようとするとき、中古の日本語の文法や語の意味を正しく理解する必要があります。また、これを可能な限り正確に現代語訳しようとするとき、現代語の語彙語法をも理解する必要があります。そのため、私どもは、多くのデータ(用例)を探し蓄積し分析するという地道な作業を日々繰り返して、文法に即して『源氏物語』を読解しつつ『源氏物語』の内容に即して文法事象を分析するという地道な作業を日々繰り返しています。—こうした地道な作業を根気強く継続することのできる方とともに、調査研究を継続していきたいと私どもは願っています。

日本文化

鈴木 さやか Sayaka Suzuki

●准教授 [博士(文学)] ✉ iwakura@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 日本古典文学(主に中古・中世文学)

[研究テーマ] 世阿弥能楽論および謡曲の研究、特に能「羽衣」についての研究



世阿弥の能楽論、世阿弥とその周辺の作者による謡曲の研究を専門分野としています。また、物語や和歌、俳諧に描かれる「自然」に注目し、花鳥風月に人のいかなる心象が重ねられているかについても関心があります。近年は清水区三保松原を舞台とする能「羽衣」の魅力を県内外、国内外に伝えることを通じて、「古典を活用した教育・国際交流」のモデルを作りたいと考えています。

学生さんたちには、研究を通じて、「自分とは異なる他者の意見に耳を傾けること」「対象の細部と全体の両方に気を配ること」を身につけてほしいと願っています。古典作品には、私たちがより良く生きるための豊かな知恵がかくされています。教える・教えられるの関係ではなく、知恵を汲み取って行く同行として、ともに作品を読み解いていきましょう。

アジア文化

奥園 秀樹 Hideki Okuzono

●教授 [修士(学術)] ✉ okuzono@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 朝鮮半島地域研究、国際政治

[研究テーマ] 現代韓国政治外交、朝鮮半島を取り巻く国際関係、韓国・北朝鮮関係



教育:歴史の経験から「変わるもの」と「変わらないもの」を認識することができれば、それは現在を理解し、将来を見通すうえで大きな力となり得る。歴史を「現在の視点」から見ることで、刻々と変動する「今」を複眼的に捉える目を養いたい。

研究:朝鮮半島の現代史を学ぶことで「現在」が抱える問題をあぶり出し、それを整理分析しながら解決策を見出していく。そうした作業を積み重ねることで、最終的には、時代を超えイデオロギーを超えて、朝鮮半島の歴史の底流に流れ続ける「何か」に迫ることができたらと考えている。

比較文化専攻 教員紹介

アジア文化

小針 進 Susumu Kohari

●教授 [政治学修士] ✉ sochim@livedoor.com

[専門分野] 現代韓国・朝鮮社会論、北東アジア地域研究

[研究テーマ] 日韓間の相互意識の研究、日韓関係に関わった要人へのオーラルヒストリー



①経歴：千葉で生まれ、東京や埼玉で育つ。都内の大学で朝鮮語と国際関係論を学ぶ。卒業後、団体職員(東京、ソウル)や駐韓日本大使館員として働きつつ、ソウルの大学院でも学ぶ。

②研究：日本人が韓国を、韓国人が日本を、それぞれどう眺めているか(眺め合っているか)に関心がある。このため、社会心理学専門の研究者と社会調査をしたり、政治学者らと日韓関係を知る要人(大統領を含めた閣僚経験者、大使経験者、研究者など)にオーラルヒストリーを実施している。リアルな日韓関係や政情もウオッチ・分析して、言論での発信も行う。

③求める学生像：研究は自助努力が第一で、安易に人を頼らない。学問と同時に、(ネットでなく)新聞を購読して、社会、言葉、マナーの勉強をしてほしい。好奇心旺盛に日本国内を鉄道で旅したり(たとえば、自分の名前と同じ駅を訪ねるとか=写真参照)、本を片手にLCCで国外へ飛んでみよう。

アジア文化

奈倉 京子 Kyoko Nagura

●教授 [博士(社会学)] ✉ nagura@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 中国地域研究、文化人類学

[研究テーマ] 中華圏の社会と文化、中国のポスト社会主義的状況における社会的弱者の共生論理



中国民衆の生活、文化習慣や社会の基層構造及び、「中華圏」(中国、台湾、シンガポールを中心とする華人世界)を対象に、草の根の視点から、社会で周縁化された人々の主流社会への融合・適応に関する調査研究に従事し、「官」と「民」の相互作用や中国のポスト社会主義的体制が当事者へ与える影響について検討してきました。研究の「問い」を、現地の人との「雑談」を通じて見出し、生活者のなかで何が本質的な問題とされているかに注意しながら調査を進めています。学生には、異文化理解の学問的訓練を通して、「人に対する想像力」、「コミュニケーション力」や「異質な存在に対する大らかな姿勢」を養ってほしいと願っています。大学院での学びが、実社会における実践や自らの人生の進路選択に結びつけるきっかけになってほしいと願っています。

中国民衆の生活、文化習慣や社会の基層構造及び、「中華圏」(中国、台湾、シンガポールを中心とする華人世界)を対象に、草の根の視点から、社会で周縁化された人々の主流社会への融合・適応に関する調査研究に従事し、「官」と「民」の相互作用や中国のポスト社会主義的体制が当事者へ与える影響について検討してきました。研究の「問い」を、現地の人との「雑談」を通じて見出し、生活者のなかで何が本質的な問題とされているかに注意しながら調査を進めています。学生には、異文化理解の学問的訓練を通して、「人に対する想像力」、「コミュニケーション力」や「異質な存在に対する大らかな姿勢」を養ってほしいと願っています。大学院での学びが、実社会における実践や自らの人生の進路選択に結びつけるきっかけになってほしいと願っています。

アジア文化

富澤 かな Kana Tomizawa

●准教授 [博士(文学)] ✉ t-kana@u-shizuoka-ken.ac.jp
☎ 054-264-5344

[専門分野] 宗教学、インド研究、死生学

[研究テーマ] インド周辺の、オリエンタリズム問題、近代的宗教概念の展開、英人墓地の表象など



私の専門は宗教学です。インドに関する異文化理解、宗教多元論、「オリエンタリズム」等の問題を、英領インドにさかのぼり、特に言説と慰霊表現に着目して分析する研究をしています。バラバラなテーマに見えるかもしれませんが、これらはすべて何かの「狭間」にかかわるテーマです。そもそも宗教学それ自体、神学から切り離れて成り立ちながら、社会科学の客観の論理とも完全には同化せず、その狭間に残った学問といえると思います。そのため、矛盾や曖昧性や限定性等々、多くの問題を抱えているのですが、だからこそ、近代の学問の客観の論理と、宗教という大変主観的な現象との境に宙づりになりながら、それらを結びつける「場」を開く、とてもユニークな学問になっていると、私は考えています。異なる存在や論理の間にはどんな関係を見つけ、作り出していくのか。学生の皆さんと一緒に、学問と日常を往還しながら、考えていきたいと思っています。

私の専門は宗教学です。インドに関する異文化理解、宗教多元論、「オリエンタリズム」等の問題を、英領インドにさかのぼり、特に言説と慰霊表現に着目して分析する研究をしています。バラバラなテーマに見えるかもしれませんが、これらはすべて何かの「狭間」にかかわるテーマです。そもそも宗教学それ自体、神学から切り離れて成り立ちながら、社会科学の客観の論理とも完全には同化せず、その狭間に残った学問といえると思います。そのため、矛盾や曖昧性や限定性等々、多くの問題を抱えているのですが、だからこそ、近代の学問の客観の論理と、宗教という大変主観的な現象との境に宙づりになりながら、それらを結びつける「場」を開く、とてもユニークな学問になっていると、私は考えています。異なる存在や論理の間にはどんな関係を見つけ、作り出していくのか。学生の皆さんと一緒に、学問と日常を往還しながら、考えていきたいと思っています。

アジア文化

堀内 賢志 Kenji Horiuchi

●准教授 [博士(学術)] ✉ khoriuchi@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 国際関係論、比較政治、ロシア地域研究

[研究テーマ] ロシアの中央地方関係・地方政治(ロシア極東地域)、北東アジアの国際関係



主として政治学、国際関係論の立場から、現代ロシアの中央地方関係や地方政治、地域政策、対外関係などを研究してきました。特に、広大なロシアの中でも、アジア太平洋諸国に近接したロシア極東地域に焦点を当て、また日本、中国などの北東アジア諸国とロシアとの関係に注目しながら研究を行っています。

ロシアは歴史的に欧州と密接な関係を持ってきましたが、一方でロシアの国土は4分の3がアジアに属しており、その政治・経済・社会のあり方もアジア諸国との類似性を持っています。ここから、私はロシアと中国との比較に関心を持ってきました。対外関係においても、特に近年、ロシアはアジア太平洋諸国との関係強化を進め、グローバルなレベルの諸問題にも常に関与しようとしています。このような独自性を持ったロシアを分析することには、難しさや面白さがあります。ぜひ皆さんとそうした難しさに挑戦しながら、その面白さを共有していきたいと思っています。

アジア文化

米野 みちよ Michiyo Yoneno-Reyes

●教授 [PhD in Philippine Studies] ✉ michiyo.yoneno@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 東南アジア文化論、音楽学、文化人類学

[研究テーマ] フィリピン先住民の音楽と社会、在日外国人の音楽活動、東南アジア看護師・介護士の国際移動



【研究紹介】マイノリティといわれる人たちの音楽活動やケアワークの人類学的調査を通して、彼らが、国家など近代社会の諸制度や、他のマイノリティの人たちとどのように関係性を築くのか、研究してきました。

1. フィリピンの先住民の音楽と社会。国家や植民者米国との関係。
2. 在日外国人の音楽学活動。
3. 東南アジアから日本にきた看護師たちの帰国後の活動。
4. 20世紀初頭のフィリピンにおける日本人コミュニティ(商業活動、現地の人との交流、等)。

【メッセージ】良質な書物や論文をたくさん読んで、知の筋トレを行い、知の基礎体力をつけていきます。プレゼンや小論文執筆は、実践的なトレーニングを行い、スキル向上を目指します。学生の好奇心を満たしながら、合理的・批判的思考を養います。東南アジアの音楽・芸能などを研究したい人、先住民や移民、またジェンダーなど、あらゆるタイプのマイノリティの理解を深めたい人を特に歓迎いたします。

アジア文化

塩崎 悠輝 Yuki Shiozaki

●准教授 [博士(神学)] ✉ shiozakiyuki@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 東南アジアのイスラーム、イスラーム法学

[研究テーマ] イスラームと近代、地域を越えたイスラームの思想の広がり



教育と研究：東南アジアの社会や政治、文化、宗教のことを教えています。自分の研究では、イスラームについて書かれた様々な言語の文書を読んで、思想や歴史のことを研究しています。東南アジア、特に現在のインドネシアやマレーシア、タイ南部にあたる地域が対象です。中東や南アジアも研究の対象にしています。東南アジアやイスラーム世界全般が自分の研究に関係あると思っています。

大学院生に必要なと思うこと：自分はこのことにとっても関心がある、という問題を持ってほしいと思います。その問題について書かれた本を知っていて、読んでいればなお良いです。私が教える場合は、まず、その問題についてどういう研究方法によってその問題を研究できるのかを学びます。次は論文を書く訓練をします。基本的には、そこに至る手伝いを私がします。どうすればいいかわからなければ、アポイントメントをとって相談に来てください。

英米文化

栗田 和典 Kazunori Kurita

●教授 [文学修士] ✉ kurita@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 西洋史学(近代イギリス史)

[研究テーマ] 18世紀イギリスにおける犯罪・裁判・刑罰



プロフィールについては個人のウェブサイト参照してください。
<http://www.kkurita.com/home/go-aisatsu/who>

大学の教員データベースに業績一覧があります。

<https://db.u-shizuoka-ken.ac.jp/show/prof82.html>

学生にもとめることは一つです。勉強や研究だけをしていればよい、それがゆるされる時間を大切にしてください。

英米文化

澤田 敬人 Takahito Sawada

●教授 [博士(総合社会文化)] ✉ sawada@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 比較国際教育学、教育社会学、オセアニア研究

[研究テーマ] 世界政体/世界文化のグローバル収斂理論 テスト・ガバナンスとハイスティクス性



研究成果の蓄積による比較国際教育学への貢献を目指しています。世界政体/世界文化の理論的観点から、地球規模で各国に類似し時には共通する教育政策がどのような構想により成立するのか分析しています。とりわけ長年にわたり研究を進めている国はオーストラリアです。オーストラリア連邦の全国学力テストNAPLANを実施する際、ニューサウスウェールズ州で行っていた州の学力テストに他州を巻き込み、それぞれの州独自の学力テストをまとめることができたのはなぜでしょう。OECDの国際学力調査であるPISA創設に向けたオーストラリアの代表者も、NAPLANの創設も、ニューサウスウェールズ州独自のテストも皆同じリーダーのもとで運営する点に共通性がありました。この事例を手がかりに教育行政を分析し、テストガバナンスの一般理論の構築を目指します。求める学生像は、知的な探究に終わりはないと考える人です。研究指導では、学問の基礎を十分に確立することを指針とします。

研究成果の蓄積による比較国際教育学への貢献を目指しています。世界政体/世界文化の理論的観点から、地球規模で各国に類似し時には共通する教育政策がどのような構想により成立するのか分析しています。とりわけ長年にわたり研究を進めている国はオーストラリアです。オーストラリア連邦の全国学力テストNAPLANを実施する際、ニューサウスウェールズ州で行っていた州の学力テストに他州を巻き込み、それぞれの州独自の学力テストをまとめることができたのはなぜでしょう。OECDの国際学力調査であるPISA創設に向けたオーストラリアの代表者も、NAPLANの創設も、ニューサウスウェールズ州独自のテストも皆同じリーダーのもとで運営する点に共通性がありました。この事例を手がかりに教育行政を分析し、テストガバナンスの一般理論の構築を目指します。求める学生像は、知的な探究に終わりはないと考える人です。研究指導では、学問の基礎を十分に確立することを指針とします。

比較文化専攻 教員紹介

英米文化

須田 孝司 Koji Suda

●教授 [博士(文学)] ✉ suda@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 第二言語習得、心理言語学、英語教育

[研究テーマ] 第二言語学習者の文法知識、文理解の過程、文法知識の段階的発達、言語教育



日本人は、中学高校と長年英語を勉強してきたとしても、なかなか英語がうまくならないとよく言われています。日本で生まれ育った人であれば、たいていは小学校の入学前から自然に日本語を話せるようになっていると思いますが、英語となると大変です。なぜ日本人は、長い間英語を勉強したとしても、なかなか英語ができるようにならないのでしょうか？学校での教え方のせいでしょうか？学ぶ側の意識ややる気の問題でしょうか？日本語と英語の差といった言語自体が原因でしょうか？私はこのような第二言語習得に絡む様々な問題について研究しています。

自分が不思議に思っていることや自分がこれまで抱えてきた言語に関する疑問について、実証的、また理論的に研究することができる人、あれこれ臆呑みにせず、周りに流されず、自分で考えることが好きな人を求めます。

英米文化

長野 明子 Akiko Nagano

●教授 [博士(文学)] ✉ nagano.9@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 言語学・英語学、特に形態論・語形成分野

[研究テーマ] 言語間や方言間の対照比較



私が専門とする形態論・語形成論は、言語学のうち、「語」や「接辞」に注目する分野で、意味と音声とが連合する基礎レベルとして面白い分野です。このレベルを中心に、言語間や方言間どのような共通性と相違がみられるかを調べています。

これから研究の世界に入られる皆さん。道のりは楽ではないですが、院生時代にわからなかった一文が、20年後にぱっとわかるといううなすばらしい経験もできます。考え続けることの楽しさと苦しさを共有しましょう。

英米文化

ディハーン ジョナサン Jonathan Dehaan

●准教授 [Ph.D.(教育学)] ✉ dehaan@u-shizuoka-ken.ac.jp ☎ 054-264-5355

[専門分野] 教育学、教育法、言語リテラシー、ゲーム

[研究テーマ] ゲームを活用し言語リテラシー能力を向上させる革新的教育法を多分野で実践する



研究プロジェクトは主に地域社会に関連することをやっている。学生主体のゲーム雑誌の制作や1週間のゲームキャンプ、地域の児童館でのゲームクラブの活動を支援したり、こども病院でのボランティア経験がある。現在は、学生がゲームを深く遊び、ゲームについての学術的研究を行い、

学生たちの経験や知識を社会の多方面で活躍できる研究プロジェクトの枠組みである「ゲーム寺子屋」をもちいて活動している。私の研究室を希望する学生には、社会の問題を理解し、その問題の解決策をプロジェクトを通して活発に探究することを望みます。

英米文化

望戸 愛果 Aika Moko

●准教授 [博士(社会学)] ✉ a-moko@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] アメリカ史研究、歴史社会学

[研究テーマ] 第一次世界大戦とアメリカ社会、戦場巡礼、軍人墓地



【研究内容】第一次世界大戦期・大戦後のアメリカ社会について、歴史社会学の視座から研究を行っています。今まで取り組んできた主な研究テーマは、下記の通りです。

1. 男性退役軍人組織の設立と戦場巡礼事業
2. 女性従軍体験者の組織化過程

3. 戦中・戦後における戦没兵の母親の役割
加えて、アメリカの政治学者シンシア・エンローについての学説史的研究も行っています。エンローは、戦争・軍隊のジェンダー分析に取り組んだパイオニアとして知られている研究者です。

【指導方針】歴史研究には、数多くの史料を丁寧に読み込むことが求められます。特にアメリカの史料を読む場合、英文読解力に加えて、従来所与とされてきたナショナルな枠組みを相対化する力や、人種・ジェンダーの多様性への注目、グローバルな思考などが必要とされるでしょう。

英米文化

リダン ポール アラン Paul Alan Lyddon

●教授 [Ph.D.(Second Language Acquisition and Teaching)] ✉ palyddon@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] Intercultural Communication

[研究テーマ] social semiotics, multimodality, ICTs, online telecollaboration



Effective communication entails much more than mastering a linguistic code. It also requires a command of numerous other semiotic resources, including visual, aural, spatial, and gestural elements. Moreover, the meaning potentials of these various resources are not only socio-historically situated but also then negotiated in the course of social interaction. My research focuses on communication between interlocutors from different cultural backgrounds, especially in digitally mediated environments. Students under my supervision examine various aspects of intercultural communication in order to understand their interconnected roles in its effectiveness and to foster the development of greater symbolic competence. Data collection in past studies, for instance, has involved online exchanges between participants in different countries completing collaborative tasks across national boundaries. If you are observant, analytical, creative, and diligent, as well as comfortable working in English and passionate about exploring the true essence of intercultural communication, I enthusiastically invite you to work with me!

英米文化

田村 敏広 Toshihiro Tamura

●准教授 [博士(言語学)] ✉ tamuratoshi@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 認知言語学、意味論、語用論

[研究テーマ] 日英語の意味論・語用論的分析、意味解釈の背景にある動機付けの解明



日英語のさまざまな言語表現について、認知言語学、意味論・語用論の観点から分析を行っています。それら言語表現がなぜそのような意味や機能を持つのか、特に意味解釈の背後にある認知的なメカニズムに興味があります。メカニズムを明らかにすることで、なぜそのような言語表現を用いるのか、人間の認知や認識の方式の有り様が見えてきます。このように、言語そのものの分析だけではなく、言語の背後に存在する人間も意識し研究を行っています。

認知言語学、意味論・語用論の観点から、日本語あるいは英語の言語表現や構文、談話などにおける諸現象を研究したい方を歓迎します。授業や演習では、多くの論文や学問書を読むだけではなく、主体的に考え、分析を行っていただく機会を多く設けるつもりです。日英語の様々な言語現象を扱い、そのメカニズムについて一緒に考え、話し合いを行いながら、言語分析の楽しさを感じていただきたいと思います。

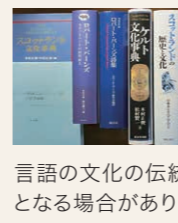
英米文化

米山 優子 Yuko Yoneyama

●准教授 [博士(学術)] ✉ yoneyama@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 社会言語学、スコットランド研究

[研究テーマ] スコットランドの地域言語・文学、多言語社会、言語とアイデンティティ



ブリテン島の周縁に位置する地域の文化の独自性を地域言語と関連させて研究しています。ブリテン島の周縁地域では、ケルト系言語の文化の伝統が地域住民のアイデンティティの支えとなる場合があります。EU離脱後のUKとの関係が注目を集めるスコットランドでは、ケルト系のスコットランド・ゲール語と、ゲルマン系のスコット語が地域言語として挙げられます。ヨーロッパという文脈の中で、このような周縁地域の言語文化を問題意識の「中心」に据え、言語とナショナリズム、話者のアイデンティティ、個人や社会における多言語併用、言語政策、少数言語の対極にある世界語などを主要な研究テーマとしています。

学生のみなさんと一緒に「周縁」に視野を広げ、新しい可能性を発見する過程を楽しみながら研究を進めています。常に新鮮な気持ちで「喜んで学び、喜んで教える」ことができたかと考えています。

ヨーロッパ文化

剣持 久木 Hisaki Kenmochi

●教授 [文学修士] ✉ hisaki@u-shizuoka-ken.ac.jp ☎ 054-264-5253

[専門分野] フランス現代史、歴史認識、公共史

[研究テーマ] 1930年代フランスのファシズム、国境を超える歴史・戦争博物館



学生時代はドイツ現代史のゼミに所属していましたが、ドイツ占領下のフランスに興味を持ったことから研究者の道を歩み始めました。また、第二次世界大戦後のフランスの記憶の問題から歴史認識も研究対象になり、現在に至っています。

最近では特に専門歴史研究と一般の人々の歴史への興味を架橋する「公共史Public history」を、歴史認識問題を解決する方法として注目しています。具体的にはヨーロッパの実例に習って、東アジアでも国境を超える歴史博物館が実現できないか模索しています。

学生には、「歴史とは現在と過去との絶え間ない対話である」という歴史家E・H・カーの言葉を実践することを期待しています。どのような研究対象を選ぶにせよ、大事なことは過去に対する現在からの問いかけなのです。

比較文化専攻 教員紹介

ヨーロッパ文化

園田 明人 Akihito Sonoda

●教授 [博士(心理学)] ✉sonoda@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 健康心理学、学習心理学

[研究テーマ] ストレスと健康の心理学



心の健康に関する心理学の研究を行っています。社会生活上で経験するさまざまな出来事は、ストレスとなり、抑うつ、不安、動機づけの低下など、心身の健康を害する重要な要因の一つとなります。しかしながら、同じストレス要因を経験しても、個人差要因や環境要因など、さまざまな媒介・調節要因によって、その影響力は異なってきます。

近年は、ポジティブ感情や幸福感など、ポジティブ心理学の研究が盛んで、そうした研究をわたくしも行っています。また、最近では、震災ストレスやネット依存など、より現実的な問題に寄与する研究も行っています。

授業では、みなさんの関心にも沿いつつ、ウェルビーイングやポジティブ心理学、ストレスと適応、児童・生徒の教育や適応の問題などを、科学としての心理学の観点から解き明かしている文献を読むことを基本として進めていきます。

ヨーロッパ文化

橋本 勝 Masaru Hashimoto

●教授 [教育学修士] ✉hasimot@u-shizuoka-ken.ac.jp
☎054-264-5243

[専門分野] 教育社会学

[研究テーマ] 日本における教科外の教育活動に関する歴史的検討



私は、教育社会学の研究をしてきました。学校教育を社会的に分析するという立場で、これは、学校教育のなかで生み出される成果や問題を、それに関わる個人に注目するのではなく、それを生み出す人間同士の係わり合いや、社会との関係を通して考えていこうという立場です。

私は教育社会学の中でも、歴史的なアプローチを採ってきました。学校教育が生み出す成果や問題・課題の、今日の状況について研究するというのももちろん重要と考えてはいますが、しかし、そうした成果や問題・課題に接近し、理解するためには、それらが生じた、あるいは生じる前の日本の学校教育の立ち上げの時期にまで歴史的にさかのぼって考察してみることも重要であると考え、こうした歴史的な問題の把握の仕方を心掛けてきました。

ヨーロッパ文化

橋川 裕之 Hiroyuki Hashikawa

●准教授 [博士(文学)] ✉hashikawa@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 東ローマ帝国史、ギリシャ文化史、古代地中海史

[研究テーマ] 印欧語族の一派であるギリシャ人がいかに地中海域に定着し、独自の文化・伝統をはぐくんだかを考察しています



私の当初の研究テーマは、13・14世紀における東ローマ帝国の宗教問題でした。当時の歴史家や教会関係者がギリシャ語で記した種々のテキストを読解しつつ、激変する社会に生きる人々の思考や心理を明らかにすることを目指しました。この研究を通じて、古代から現代にいたる、ギリシャの文化・

伝統そのものの展開に興味を持つようになりました。今日、ギリシャ語と称される言語が公用語として使用されているのはギリシャ共和国とキプロス共和国のみですが、古代においてそれはギリシャ人の支配・居住領域の拡大にともない、国際言語のような地位を得るにいたりました。ルネサンス期になると、一部の開明的なヨーロッパ人は競うようにその学習に取り組みました。彼らにとって、ギリシャ語は未来への扉を開くカギのように思われたのかもしれませんが。ギリシャ語に触れる、ギリシャ的なものを追究する、こうした営為が今なお必要であることを私は確信しています。

ヨーロッパ文化

ファイファー マティアス Matthias Pfeifer

●准教授 [修士(ドイツ文学)] ✉pfeifer39@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 文学社会学、映像論

[研究テーマ] 戦争の記憶 (マスコミ、文学、映像における戦争)



戦争をめぐる議論の中、画像・映像は重要な役割を果たしている。写真、戦線で撮影された実録。戦争賛美の絵葉書、戦後の戦争映画、それにインターネットにアップロードされた動画が、戦争のイメージを形成する。漫画やパソコンゲームに見られる戦場の描写も、特に若者に影響を与える。それ

らの戦争の表象を理解するためには、S. クラカウアーが創立した映画社会学やその他の映画理論の概念だけではなく、M. アルバックスの「集団記憶」のような、幅広いアプローチも不可欠な基礎研究となる。戦争に間接的に結びつくテロも、映像社会学の対象に含まれる。テロ組織のプロパガンダビデオや、そこで美的な映像効果をおさめようとする行為は犯罪をあり立てる。そのような行為はきちんと分析・批判されるべきであり、「映像の時代」における現実と映像メディアが作るバーチャルリアリティのあいだの曖昧な関係を理解することはたいへん重要であると考えます。

ヨーロッパ文化

松森 奈津子 Natsuko Matsumori

●教授 [Ph.D(政治学)] ✉nmatsu@u-shizuoka-ken.ac.jp
☎054-264-5263

[専門分野] 政治思想史、国際思想史

[研究テーマ] 初期近代スペイン思想(サラマンカ学派、インディアス問題、反マキアヴェリズム)



私の専門分野は、政治学、国際関係論、歴史学にまたがる思想史研究です。

自分とは異質な他者をいかに偏りなく理解し、互いの自由、権利、正義を抑圧しない公正な秩序を作るか。つまり、人間として同じ価値をもつ個人すべてが、他人の権利を侵さない限り自分の思う通りの人生を送れる社会をどう実現するか、あるいはそうした個人々の集合体としての社会の規範(共通善)をどう定め、保つてゆくか。洋の東西を問わず、古来の思想家たちはそれぞれの時代の課題に取り組むことを通じ、これらの問いに向き合ってきました。

思想史研究は、そうした先人の知恵に助けを借りながら現代社会の課題を提起し、私たちの暮らしを少しでもよいものに変えていこうとする精神に共感できる人に適した学問領域です。

ヨーロッパ文化

小谷 民菜 Tamina Kotani

●准教授 [文学修士] ✉kotani@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] 近現代ドイツ文学

[研究テーマ] ハインリヒ・ハイネの芸術評論、諷刺画と文学との関係



ドイツの詩人・評論家ハイネ(1797~1856)の文芸評論、さらに時事評論を読んでいる。その特徴は造形芸術と文学とがなまぜになって論じられていることで、明瞭な輪郭を持った「造形性」の要求は、芸術のレベルのみならず、社会現実面に対する強い関心のあり方にもつながっているのではないかと

という立場から検証を進めている。他方、ハイネの生きた19世紀前半のパリで出回った諷刺画と彼のテキストの間の影響関係をこれまで調べてきた。その他、諷刺画のみならず、初期の写真にも範囲を広げて、別のメディア、新しい知覚の問題をもテーマとしている。授業では、テキストの正確な理解を求めつつも、多義的な視点や解釈を示唆し、ハイネの著作がどのようなアクチュアリティを持っているのかを確かめたい(なお、ハイネ以外の近現代作家を扱う場合もある)。学生には十分なドイツ語の読解力があること、時代背景に対し積極的な知識欲を持つこと、現在というものに対する真摯な姿勢、すなわち常に「今」「ここ」の自己と関連付けて思考すること等を望む。

ヨーロッパ文化

森 直香 Naoka Mori

●准教授 [博士(哲文学)] ✉naokamori@u-shizuoka-ken.ac.jp

[専門分野] スペイン文学、比較文学

[研究テーマ] ガルシア・ロルカ作品の受容、スペインにおける日本文学受容、アダプテーション研究



スペイン文学、比較文学が専門です。文学テキストに時代や国境を超える力を与えるのは何かという問いに、受容史やアダプテーションの面からアプローチをしています。具体的には、フェデリコ・ガルシア・ロルカ(1898-1936年、スペイン)の戯曲がスペインや日本でどのように紹介、出版(翻訳)、上演されたのかを検討したうえで、それぞれの読者がどのような独自の解釈を生み出したかを考察します。また、日本文学がスペインでどのように読まれているか、書かれたテキストが映像や舞台にアダプテーションされるときに何が起るのかというテーマも扱っています。

授業を履修する学生にはある程度のスペイン語力と文学理論の基礎知識(あるいは、これらを身につけようとする意欲)があることを求めます。

Q&A

Q1.

留学生にとって日本語で論文を書くのは大変なことです。留学生向けに日本語論文の作成を支援するサービスはあるでしょうか？

A. 留学生を主な対象に、日本語で論文を執筆する際の基礎を学ぶ日本語論文支援講座を行っています。また、留学生を対象に、修士論文の草稿を読んで日本語表現の誤りや不自然さなどをチェックする添削サービスも行っています。

Q2.

文献のコピーや購入、学会出張などの際の経費を補助してもらえる制度はありますか？

A. 本学図書館のコピー機を研究科の負担で利用できるほか、書籍の購入に使用できる研究支援費や、国内学会への参加等に使用できる国内研究旅費を公募・選定の上で支援しています。また、海外で開催される国際学会で研究発表を行う際に、その旅費の一部を支援する制度もあります。

相談窓口

本研究科について、わからないこと、知りたいことなどがありましたら、研究科の助教がご相談に応じます。

E-mail gsir-contact@u-shizuoka-ken.ac.jp

左記のメールアドレスまで、お気軽にご連絡ください。

修士論文の題目例 (2021年度修了者)

- 「日本の外国語系専門学校における多文化共修—接触仮説からの考察—」
- 「中国の『弹幕』文化の今後—日本の『弹幕』文化との比較をもとに—」
- 「援助要請行動の抑制要因としての心理的負債の検討—中国人大学生を対象としたweb調査から—」
- 「障害のパラダイムシフトはいかにして起きたのか—アクセシビリティをめぐる市民社会と政府の相互作用の分析—」
- 「Waste Banks in New Town: Formation of Neighborhood Association and New Public Management in Indonesian Suburb」
- 「日本人英語学習者によるwh移動の制約」
- 「スペイン女性義勇兵の記憶—共和国軍の青いつなぎの女性たち—」
- 「韓国『#MeToo』運動の展開と拡大要因に関する考察—朴元淳事件を中心に—」
- 「中国人日本語学習者におけるあいづちの種類と頻度—JSL環境とJFL環境の比較—」

※題目一覧は研究科特設サイト(URLは2頁参照)に掲載しています。

長期履修制度

本研究科では、2023年1月から長期履修制度を導入しました。この制度では、職業従事、育児、介護と学業の両立、障害による就学の困難等の理由で、標準的な修業年限(2年)での修了が難しい方を対象に、承認された場合、最長4年まで修業期間を延長することを認めています。その場合、授業料は、2年分の総額を認められた年数で分割して納入することになります。詳細については、学生部学生室(TEL (054) 264-5009)までお問い合わせください。

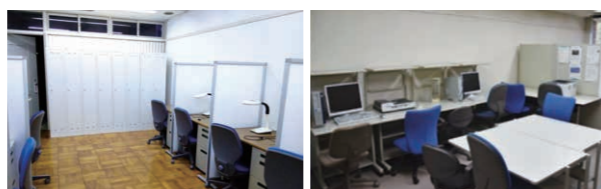
研究生制度

本大学院では、正規の大学院生とは別に、本学教員の指導の下で特定の専門事項について研究することを希望する者を、研究生として受け入れる制度があります。研究科で入学資格の確認、所定の手続き等を行った後、学長が入学を許可します。詳細については、学生部学生室(TEL (054) 264-5009)までお問い合わせください。

就職先の例

静岡市中学校教員、静岡県高等学校教員、聖隷クリストファー中・高等学校教員、南山学園、A.C.C.国際交流学園、静岡県、藤枝市、静岡新聞社・静岡放送、静岡銀行、中国人民銀行、鈴与システムテクノロジー、サクラクレパス、エンケイ、ハイテクシステム、エコワーク、レマコム、パナソニックフォトライティング久美浜、AFC-HDアムスライフサイエンス、ソミック石川、すずらん協同組合、ボッシュ、ブラッツ、源、楽GOO国際、エーツー、さかえ、ヤマハモーターパワープロダクツ、北海道電力、ダイナックス、廣杉計器、トライグループ、日本NCR、金子コード、新大陸、シエスタゲート、アサヒサンクリーン

研究室・コンピュータールーム



学内の勉強場所として、大学院生専用の研究室とコンピュータールームが設置されており、常時利用が可能です。

在学生の声

研究を通じて日本の文化や社会についても深く理解

私は中国から来た留学生です。私の研究課題は、冷戦時期における日本の外交政策の変化についての研究です。この研究では、日本が時代とともに変化した外交転換について詳しく調査しています。私は、学校の勉強活動が豊富かつ忙しいという現実に直面していますが、この研究を通じて、日本の外交政策についての洞察を得ることができ、国際関係についてより専門的な知識を磨くことができます。さらに、私は、この研究を通じて、日本の文化や社会についても深く理解することができます。留学生として新しい環境に順応することは大変ですが、学校での学びと研究を通じて、日本という国や文化についての知識や理解を深めることができることを、私たちはとても楽しみにしています。学校には留学生のために専任のカウンセラーがおり、様々なサポートを提供しています。大学では、学生の方々が、自分自身を表現し、知識を深め、国際社会に貢献するためのスキルを身につけることができます。学校は、学生の学問的な成長をサポートするために、最新の教育技術やリソースを提供し、将来的なキャリアに役立つ知識やスキルを身につけることができます。

宋 博洋さん

国際関係学専攻
国際政治・開発研究分野



研究の大きな助けとなる指導・授業

私は、1917年のロシア革命によって日本にやってきた亡命ロシア人について研究しています。主として彼らのコミュニティ形成のあり方を考察していますが、資料を読み込んで問題解決の糸口がなかなか見つからない状況が続きました。そこで、研究科での指導・授業が、糸口を見出す大きな助けとなりました。自分の研究テーマについて考え、アウトプットできる授業形態や、他分野の研究を行っている先生・同級生と多角的な視点で議論できる授業環境は、自分の視野を広げさせてくれます。指導教員とも定期的な指導を受けることができるため、研究テーマについて悩んでいるときも相談しやすい環境です。また授業で研究方法や先行研究のまとめ方、資料の扱い方等、今後の社会でも活用できるスキルも学べると思います。同級生と高め合い、多くの知識を吸収できる環境で研究に没頭できることに感謝しつつ、先生方の指導を活かし、研究に邁進していきたいと思っています。

松本 隼佑さん

比較文化専攻
アジア文化研究分野



修了生の声

08-06 Message 社会人経験を生かし、正面からフィールドと向き合う 岩本 和太さん(専門学校教員) 国際関係学専攻

2022年
3月修了



私は社会人学生として3年間、国際関係学専攻に通いました。仕事と研究の両立は大変でしたが、刺激的で充実した日々でした。進学した一番の理由は、仕事を通じてどうしても知りたかったことだからです。私は大学卒業後、国内外の教育現場で異文化に触れながら働きましたが、次第に教育内容だけでなく「異文化接触を通じた学びや成長」に関心が集約していき、その先にあったのが大学院進学でした。社会経験を基に研究できるのが社会人学生の良さと、研究成果が次のキャリアと社会貢献につながるのを感じています。授業で最先端の知識を持つ先生方や大学院生同士で語り合ったことは、本当に貴重な時間でした。様々なサポートにも感謝しています。私は国際関係学専攻で学んだことで新たな世界が広がりました。まずは興味のある研究室に連絡を取り、職場等と調整をし、進学の可能性を探るのが良いと思います。

08-06 Message 学際的な視野を広げ、比較文学研究への道を開いてくれた修士課程 那須野 絢子さん(常葉大学教員) 比較文化専攻

2012年
3月修了



大学卒業後、文学研究への憧れを抱きつつも就職の道を選んだ私にとって、社会人として通った国際関係学専攻での時間は、人生に転機をもたらす貴重な経験となりました。限られた時間の中で単位を取得する必要があったため、科目履修生として1年間所属した後に正式に入学をしました。大学時代は、関心のあったイギリス文学に特化した授業のみを受け学士を取得しましたが、静岡県立大学での修士課程では、ドイツ、ラテン、日本の文学、歴史など広い視野を以て学問研究が可能になったことは大きな収穫でした。先生方が私の修論テーマに沿った教材を選定し、丁寧に指導をしてくださった賜物だと思います。現在は、大学院時代の学びを活かし、大学教員として比較文学を専門領域に研究活動に励んでおります。また最近では、オムニバス授業で県立大学において講義を行う機会もいただき、母校に仕事で関わられることを大変うれしく感じております。